

## 平成30年度第1回滋賀県総合教育会議 会議録

### 1 日時

平成30年5月11日（金）14:00～16:00

### 2 場所

大津合同庁舎7D会議室

### 3 出席者

三日月知事、青木教育長、土井委員、藤田委員、河上委員、岡崎委員、窪田委員

【事務局】澤教育次長、小倉総合教育センター所長、山田教育総務課長、岸田教職員課長、松野健康福利室長、西川高校教育課長、青木高校再編室長、辻本幼小中教育課長、奥村生徒指導・いじめ対策支援室長、首藤人権教育課長、森特別支援教育課長、湯木保健体育課長、合田生涯学習課長、西谷文化財保護課長、中田主席参事（企画調整課）

## 4 次期 滋賀の教育大綱について

青木教育長

それでは時間もまいりましたので、今年度第1回目の滋賀県総合教育会議を開催いたします。今回はお手元にある次第にありますとおり、「次期滋賀の教育大綱」についてをテーマに御議論をお願いしたいと思います。それでは開会にあたりまして、知事の方から御挨拶をお願いします。

三日月知事

みなさんこんにちは。今日は本年度第1回目の総合教育会議ということでどうぞよろしくお願いいたします。子どもたちに人気の「ざんねんないきもの事典」という本をここにお借りしてまして、私も読もうと思っております。子どもたちの好きなものは、「おもしろい」ということの本質なのかなと思っておりますので、これからも子どもたちの視点や学校現場の視点を大事に、この総合教育会議を進めていきたいと思っております。

全国各地を見渡しますと、子どもたちが犠牲になる事件や事故がございます。そういったものにも敏感に、また心を寄せながらそのような惨事が県内で起こらぬよう、課題は克服し可能性は伸ばせるようにお互い努力をしていきたいと思っております。

今年度最初の総合教育会議ですし、いまま教育長からお話がありましたように、県の教育大綱を定めるための場でもございますし、関わる教育振興基本計画についても次期計画の策定期を迎えておりますので、大綱と連動する形で御議論いただければと思っております。改めまして知事としての教育に対する考えを短く申し上げて、後の議論に付していただければと思います。

1点目は、「人は人の中で人になる」という考え方でございまして、これは議会でもこの場でも常々申し上げていることであります。そのような考えに基づいて諸施策を作れるように、行えるように邁進しているところでございます。一人ひとりの個性を大事にしたい、またどんな状況でも柔軟に対応できる学ぶ力や生きる力を身に付けられるような人づくりを行ってまいりたいと思っております。世の中が急速に変化していますし、情報化、グローバル化が進んでおり、一体何が正しくて、自分は何に合うのかということがなかなか見つけにくい時代であるか

からこそ個性や独自性というものを大事にしていきたいと思います。

二点目は、先般も明智光秀が大河ドラマでとりあげられるということで、今までの歴史からすれば考えられてこなかったことが認められ始めています。滋賀県は琵琶湖をはじめとする自然も豊かですし、その中で育まれてきた文化や繰り広げられてきた歴史ドラマがあるのだなと思っています。そういった滋賀ならではの「学び」ということも大事にしていきたいと思いますし、滋賀ならではの「育ち」というものも形作っていききたいと考えております。

本県には、とりわけ「近江の心」というものが根付いています。糸賀一雄先生の「この子らを世の光に」の考えにある「一人ひとりを大切にする心」。また、雨森芳洲先生の「たがいに誠をもって交わろう」。さらには、中江藤樹先生の「生まれながらにして持っている良識」という考えにある多様な文化を理解する心などを大切にしながら、近江商人にもつながる、そういう心をつくっていかれたらいいなと思います。

こういう事まで申しますと、とにかく大人と子ども、社会と学校を分けた形の議論になりがちですが、社会全体で学ぶ、大人も子どもも共に学ぶ、生徒も教師も一緒に育つという教育をみんなで作っていききたいと考えているところでございます。

人生100年と言われておりまして、40、50、60歳からもう1回学ぶ、学び直すということが後の人生を豊かにするきっかけになると思いますし、その姿を次の世代が見ているのではないかなと常々思いながら過ごしております。

最後になりますが、今日午前中、県内に所在いたしますパナソニック株式会社アプライアンス社という世界の家電を作っておられる企業様が、その会社内に「モノづくり学校」というものが開設をされまして、そのオープニングセレモニーに行ってお参りました。その中で松下幸之助さんの「学ぶ心」という大事な言葉を掲げられておりました。みなさんに御紹介したいと思います。私たちは学力やテストの点数の前に、まず学ぶ力を育てようとして取り組んでおります。松下幸之助さんは学ぶ心ということで表現されておまして、学ぶ心さえあれば万物すべてこれわが師である。語らぬ木石、流れる雲、無心の幼児、先輩の厳しい叱責、後輩の純粋な忠言、つまりこれは広い宇宙、この長い

人間の歴史のなかで、どんなに小さいことでも宇宙の真理がひそかに脈づいている。人間の尊い経験と知恵が滲んでいる。万物すべてわが師であるという学ぶ心を今日お集まりいただいたみなさまと共有しながら、そういったものを大事にできる滋賀県の教育行政と一緒に一つっていくことをお誓い申し上げ、私からの挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いします。

青木教育長

ありがとうございました。毎回お願いしておりますが、今日は後ろをご覧くださいと立派な横断幕がありまして、こちらは栗東高等学校の書道部の生徒さんに書いていただきました。このとおり、今年度は各回それぞれの開催にあたりまして県立高校あるいは特別支援学校の生徒さんに御協力いただきながらいろんな作品を展示させていただきました。来年も引き続きまして児童生徒の皆さんのお力をお借りしながら総合教育会議を開催していきたいと思っております。また皆様方にも PR していただければと思いますので、よろしくお願いします。

それでは早速でございますが、議事に入りたいと思っております。まず事務局の方から資料の説明をお願いします。

真溪課長補佐

それでは、事務局から説明をさせていただきます。お手元の資料 1、「滋賀の教育の目指すべきもの ～本県が目指すべき最上位の目的はなにか～」という A4 横向きの資料をご覧ください。今回は次期滋賀の教育大綱の策定を見据え、滋賀県として最上位に目指していくべきものはなにか御議論いただきたいと考えております。資料 1 は本日の意見交換のたたき台として、平成 29 年度第 5 回滋賀県総合教育会議の総括のなかで御議論いただいた内容、県議会での答弁内容、そして教育委員会事務局の中で議論をしてきた内容を整理し、滋賀の教育が目指すべき要素についてまとめたものでございます。

まず、それぞれの場で議論されてきた内容について、順次ご説明させていただきます。まず、教育委員会事務局内での議論の欄をご覧ください。こちらには、教育委員会事務局の中で議論をしてきた内容を記載をしてございます。その中では、1 ポツ目にございますように「情報過多とも言える社会で、夢や目標を持って生きることが、幸せを追求するために必要である。」ということや、2 ポツ目にございますよ

うに「予測不可能な社会で、よりよく柔軟に生きるため、主体的に考え、多様な人と協働し、課題を解決する、生きる力の育成が必要である。」といった子どもたちの生きる力を育むことに関する議論が多くございました。生きる力に関連して子どもたちの力を育むという点については、5つ目のポツにございますように「文章を読む力だけではない、情報を読み解く力を含めた読解力の向上が、生きる力として重要である。」というような内容も議論されてきたところでございます。また、7つ目ポツの「就学前から高等教育までを含めた20年教育について、学びをつなぐ議論を深めていく必要がある。」というように、生まれてから20年間の教育の繋がりを大事にしていくべきではないかという議論もございました。次の8つ目ポツに「人生100年、長寿化への対応が必要である。」という内容が記載されておりますとおり、長寿化を見据え子どもたちのみではなく大人を含めた生涯の学びの重要性についても議論がございました。さらに、9つ目と10つ目のポツに記載があります「モノづくり人材の育成を図るため、産業界と連携したキャリア教育の充実が必要である。」と「学校と家庭・地域・社会のつながり、教育と福祉のつながりについて議論を深める必要がある。」といった内容のとおり、産業、福祉との連携についても議論のあったところでございます。

資料一番下の方には、次期滋賀の教育大綱を策定するにあたって「教育の大きな方向性が短期間で変わることは考えにくいことから、次期教育大綱の目指すべきところに大きな変更をする場合は十分な議論が必要である。」「目的を議論するにあたっては「学ぶ力」を含めた「生きる力」の議論は不可欠である。」「次期大綱では、生涯学習の要素を増やしていく必要がある。」といった議論があったものについても記載をしております。

次に総合教育会議での意見についてでございます。こちらには主に平成29年度の第5回総合教育会議でいただいた御意見を中心に整理しております。

こちらでは、平成29年度総合教育会議の「子どもたちの多様な個性を社会全体で育む」という総括と第5回会議の中でいただいた御意見の中から「県として重点的に取り組むことの明確化」、「生涯をとおして学び続ける視点」、「福祉との連携」、そして「多様な個性」

だけではなく、多様な子どもたちの力も育んでいく必要がある。」と  
 いった今後の方向性に関するものについて整理をさせていただいてお  
 ります。

最後に県議会でいただいた質問に対する答弁の内容について、資料  
 右側部分に整理をしております。まず、教育委員会の議論においても  
 出てまいりました「生きる力」に関しまして1つ目のポツにございま  
 すように、「生きる力の一つである「確かな学力」の基盤となる学習  
 意欲や学習習慣などの「学ぶ力」を育むことが大切である。」という  
 内容で答弁をしております。また、学校現場の働き方改革について  
 は2つ目のポツにありますとおり「学校現場の働き方改革は教育の質  
 を高め、子どもたちの「夢と生きる力」を育むことにつながることで  
 ある。」という内容で答弁をしております。さらに、滋賀県としてど  
 のようなところが課題であると認識しているのかということについて  
 は、「自分の考えを適切な根拠をもとに述べることなどに課題がある。」  
 という内容で答弁をさせていただいております。

特別支援教育に関しては「障害のある子ども一人ひとりの教育的ニ  
 ーズに即した対応が求められている。」といったことや、高校再編に  
 関しては「一人ひとりの生徒が生き生きとした学校生活を過ごし、「こ  
 の学校を選んでよかった」と思えるような魅力ある学校にしていくこ  
 と、また、その魅力を中学生やその保護者に向かってしっかり発信し  
 ていくことが大切である。」といった答弁もあったところでございま  
 す。

これらの議論や県議会での答弁などを踏まえ、滋賀の教育の目指す  
 ものについて一定整理をし、本日の意見交換のたたき台として記載さ  
 せていただいたものが資料中央部分でございます。まず滋賀の教育が  
 目指す「目的」について御説明をさせていただきます。いままで多く  
 の場でご議論をいただいてきた「子どもたちの「夢と生きる力」の育  
 成」や社会に大きな変化が起こっている中で、「様々な状況の変化に  
 柔軟に対応して生きる力の育成」「自ら考え課題を解決する力の育成」  
 「多様な人と協働できる人づくり」については今後非常に重要になっ  
 てくるのではないかと考えております。

こちらに記載している事項については、必要かつ十分なものをあげ  
 たものではございません。本日は、これらをたたき台としてご議論い

ただきたいと思います。説明は以上です。どうぞ、よろしくお願いいたしますします。

青木教育長

ありがとうございました。本日は次期大綱の策定に向けて、滋賀県として何を目指していくべきなのか、最上位にあるべき目標は何かということについて御議論いただきたいと思います。事務局からも説明のありました通り、この資料に記載をしております内容はあくまでたたきでございます。本日の御議論を踏まえながら、次期教育大綱で目指すものを考えてまいりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

藤田委員

御説明ありがとうございました。今日は、今までの議論を見直しながらということですので、今、ここに書かれている滋賀の目指すものとしての目的、取り組むべきこと、ということの一つ前提に教育そのものの原点ともいえる読み書きの部分を基本的な知識として付けていかなければならないと思います。一方、時代の変化が大変激しく、大きな変革で動いていますので、その変革は人類にとっては過去経験しなかったような第4次産業革命という時代を見据える必要があります。これはつまり、ロボットが人間の頭脳を手に入れていくような社会がくるということです。だから、ロボットそのものが人間の頭脳を手に入れていった時の社会の変化に人がどのように対応していくかということがこれからの若い人に求められていくんだろうと思います。そうすると、夢と生きる力のところで、例えば、夢についていえば、どのようにして、折れない心を育み、やり遂げる力を養っていきけるのかということを考えるべきで、この時代の大きな変革の中では、ここが非常に大事だと思います。そのように考えますと先ほど言いましたように、いつの時代も基本的と言える読み書きする力が大切です。企業でよく、そう簡単に言うんですけど、折れない心とか実現するということは、むしろ、EQ（エモーションクオリティ）としての心の知能指数を上げなければならないと思いますね。そうすると、やっぱり一番大事なのは、とにかく教養力の深さを高める、ということが大事だと思います。人工知能の進化の速度は、すごい勢いになってきています。働き方改革が進んでくると、学校の業務の自動化も進んでいき

ます。今の18歳で高校を卒業した人が、10年後に28歳になって、社会の前線で一番働かないといけない歳になります。もうさらに10年経つと38歳といういろんな事を背負っていかないといけない世代になります。その人たちの教育を、今どうやっておくべきかということ、私は一つ考える必要があると思います。知識で戦ったら人間はロボットに負けます。だから、知識よりも教養を持ち、どういうようにしていくことによって自分の知識を生かせるか、ということを考える人たちが増えないといけないと思います。だから、そういう意味で、教養を高めていくということは、おそらく、すごく重要な時代になってきていると思いますね。

教養力というのは本当に大事で、滋賀県のと地理的な場所が出てこない人がいたりすることは、教養の低い人が今の大人の中にいっぱいいるということだと思います。それをどこで身に付けたらいいか、ということが非常に重要です。したがって、働き方改革と生きる力と、やっぱりその成長。子どもを成長させていくということの組み合わせが非常に大事で、先ほど、松下幸之助さんのお話を紹介いただきましたが、まさに、あのおりで、全ては教材になっていくんだと思います。全ての教材を受け取っていく自分に、心の豊かさと教養がなければ、捨ててしまうと思います。今の教育の未来を考えた時に、非常に大事なことだと思います。そこから生まれてくる夢が、折れない心で実現していくべきこと、絶対ネバーギブアップな心につながっていくんだろうと思います。

河上委員

折れない心というお話がありましたが、私はしなやかな心という言葉が好きで、しなやかって言うと、弱々しいイメージがするんですが、私は折れない心と同じで、すごく柔軟性があるという意味だと考えています。やわらかいものには、かたく接したり、かたいものには、やわらかく接したり、色んなことができる心のことだと思います。今、社会の中で、様々な事件が起こっているということを考えると、本当にそのような折れない心やしなやかな心があれば、何とかそのような事件を回避できたのではないかなと思うんです。そして、全ての人がグローバル人材になったり、ITを駆使したりとか、そういう社会を望むのではなく、それぞれの個性を生かして、例えば、高校を卒業し

て、その高校の中でしっかりと職業教育を受けて、自分のしたい仕事に就いたり出来たりといったその人に合わせた器が整っている社会になるといいなと感じます。滋賀県では、特別支援教育もそうですが、外国籍の子どもたちも大変増えている状況があります。昨年度、静岡の藤枝市や浜松市の方に視察に伺いまして、ある地域では5人に1人くらいが外国籍の子どもさんという学校もありました。県や市で、どういうふうに施策をされているかといいますと、まず子どものサポートも大切ですが、子ども、そして保護者、そしてその家庭全部を学校や教育委員会で全部抱えてしまうのではなく、国際交流協会等の色々な市民の団体や地域住民、色々な人が関わり、それぞれが担い手となることで、言葉の問題とか、住居とか、就労の問題等色々なことを解決されていました。つまり、外国籍の子どもたち、家庭が日本でしっかりと定住したりとか、安心した生活を送れるということが、同じ学校の子どもたち、つまり日本の子どもたちや地域の住民も国際感覚をしっかりと持ち生きていけるということにもつながっているという、そこをすごく重要視されている地域でした。そういうことも、これから地域によっては、外国籍の子どもさんが増えているところがありますので、滋賀県も勉強していかないといけないところかなと感じました。

**岡 崎 委 員**

この滋賀で学ぶ力というのを方針というか大綱の中で大事ですよ、と知事に言われてるという中で、保護者の中には知識もやっぱ大事だという方もおられます。知識をしっかりと身に付け、その先にそれを活かし、応用して学ぶ力を伸ばしていくというご意見もありました。私もそれは大事だなと思います。

今の子どもたちを見ていると、偏った知識といえいいんでしょうか、広い視野で色々なことを知っているかというのと、そうでない子もいますし、逆に、色々なことを知っていて、上手にコミュニケーションを取れる子もいます。そういう多様性が、実際に高校を出た子どもたちが社会に出てきている中で実在しているのが現状なので、それにどう企業が対応していくかというのが日々苦労しているところです。企業が求める人材について、以前ちょっとお話したことがあります、

企業は何でもできる子、経営者とか管理職は自分が使う上で優秀な子、という表現がいいのかはわかりませんが、世の中的には色々なタイプの人がいるということが前提になっています。そこをどう受け入れて、その人たちとともに、企業活や社会の中で活動していくかということにしっかりと対応できることが必要なんじゃないのかなと考えています。ですから、これから滋賀の教育がその学ぶ力を育もうということであったり、色んな子どもたちに寄り添っていこうということを方針に掲げることはいいことだなと思っていますが、やはり、その子たちを育む親たちがその考え方になれる環境づくりということをどこかに折り込んでいただきたいなと思います。やはり、生活に困窮している世帯では、いくらこういうテーマを持って仕事に取り組もうよという話しかけをしたとしても、いやいやこの給料ではそんな難しいことできませんというふうにストレートに言われる時代です。その根底には何があるのかなというとなんかやはり満たされてないということがあるのかなと思います。それぞれの家庭の中で、その社員の子が満たされていない環境が原因かなと私個人では思っています。根拠はないのですが、自分自身に置き換えても、やはり誰かにありがとうとか助かったとか褒められることであるとか、そういう一言があるとやる気がすごく膨らむので、そういう言葉がかけられる社会が、滋賀県の中にたくさんあってほしいなと思います。滋賀の子どもたちがそういう言葉がけの中で、伸び伸びと、それぞれの個性を発揮して、将来は社会の役に立っていき、その中で柔軟な対応ができる知識も身に付けてほしいなと思います。そういうふうな社会が必要であり、それを実現する教育が重要だと思います。生まれてくる子どもの教育と、今、その子どもを育てようとする親の教育、そこが大事かなと思います。

窪田 委員

初めて参加させていただいたので、まだ頭がついていかないんですけど、資料1を読ませていただいて、一番思ったのは、個性とはなんなのか、今までどんな議論をされてきて、多様な個性を大切にしようという話になってきているのかということをお聞きしたかったという

のが1つです。また教えてください。今のお話の中で、藤田委員から教養のお話が出ていて、教養と知識ってどう違うんだろうと、私の中で今、聞きながら考えていたんですが、今の学生、大学生を相手にしていても、本当に直線的に答えを求める傾向があるなと思います。私はパソコンじゃないというくらい、私はあなたの検索機能ではないというくらい、本当に答えをストレートに求めてくることが多いと感じていまして、本当に一問一答なんです。でも、人として、長い歴史の中で蓄積されてきた文化とかは、そんな簡単に一言でポンっと検索したら分かるものでは恐らくないだろうなと思います。何か知りたいと思って、知ろうと思って調べるプロセスの中で得るものもきっとあるんだろうなと思いますし、そこで色んな人とつながる機会もまたあるのかなと思いますので、本当に単線的に、直線的にただ答えを得られたらそれでいいということではなくイと思います。もう一つは、想像力についてです。先ほどのしなやかな心とか、人とのってこともありましたが、本当に賢いなあ、しっかりしているなあって思う子も、今それを言ったら次どうなるのかということについて、なかなか先を読めなかったり、相手の立場をなかなか考えられずにいる子が多いように感じます。金曜日の夕方になって、先生、月曜日までにこれを見てほしいんですという話があると、それは私は土日どうしたらいいのかなというような、もちろん時間を作って見るわけですが、いつもいつもそれではいけないよねということを感じます。土日は、もしかしたら何か、家庭で何かがあるかもしれないし、人と一緒に働いたり人と一緒に生きていく中では、自分の都合だけではいけないこともたくさんあるというところも、想像して動こうとしたりする必要があります。そういうところは、色んな人とやっぱ関わらないと経験できない部分なのかなと今の学生を見ていて思ったりします。そこをどうこの大綱の中に入れるべきなのかは、私もまだ考えがまとまっていません。

土井委員

冒頭に藤田委員もおっしゃいましたけれども、AIの技術の進展に

どう対応していくのかという問題は、これまでもこの会議で話題になったと思います。この4月に教育行政重点施策説明会に出席したのですが、その際に、国の教育振興基本計画の策定を担当されている文科省の方から御講演をいただきました。その講演の中で、「A I V S 教科書が読めない子どもたち」という本を紹介されて、さっそく私も読んでみました。この本の著者である新井 紀子先生は、数学者で、ロボットは東大に入れるのかというプロジェクトのディレクターをされておられます。新井先生によると、新井先生たちがつくっておられる東ロボくんは、現在偏差値が57で、関関同立の一部の学科に合格できるレベルに既に達しているようです。それをこの著書で自慢しておられるのではなく、こうした現状を踏まえて、A Iに何ができるのかということと、人間が何をすべきなのかを考えようとされている本です。この本の中で一番印象に残ったのが、A Iは、論理と確率と統計を駆使して高速で計算している計算機にすぎない。意味は理解していませんとおっしゃっていることです。例えば、このスマートフォンに、「この辺りの美味しいイタリア料理はどこですか」と呼びかけると、誰よりもはやく、この周辺のイタリア料理店を何軒か答えてくれるはずです。GPSを使って私の位置を割り出して、ネットで検索して近くのイタリア料理店を拾い上げて、ネット上でついているポイントを参考にして順位を出しすぐに教えてくれます。おそらく、人間の誰よりも速く教えてくれるはずです。しかし、このスマートフォン自体は、味を理解している訳ではない。人間にとって食べるということがどのような意味があるのかを理解している訳でもありませんし、自分でその店に行ってこの店がいいと思って答えている訳でもないのです。それを、この本ではおっしゃっておられます。A Iが意味を理解できない、ということと、とても印象的に表現されているフレーズがあります。「A Iは、私はあなたのことが好きですということと、私はカレーライスが好きだ、ということの間にある本質的な違いを理解できない。」と。この違いを数学的に表現する方法が非常に困難なのです。文法的に、誰それは〇〇が好きだ、という構造は理解できるの

ですが、あなたのことが好きだと言っている意味と、カレーが好きだと言っていることの意味の違いを理解しないということをおっしゃっているわけです。逆に言いますと、そこに人間のやるべきことがある。つまり、意味とか意義を考えることが、人間にとって一番大事なことのなのだと思います。そして、このことを今日の議論に引き付けていえば、人間にとっての意味とか意義などを考える上での基礎にあるのが、人が生きる目標とか目的になるのだろうと思います。何を目指して生きたいのか、何がしたいのか、この社会はどうあるべきなのか、といったこと、それを「夢」と呼ぶのであれば「夢」が大事なのだろうと思います。夢が人間にとっての意味・意義の源泉になるはずで、そこをしっかりおさえていく必要があります。次に、その夢を実現するためにどうするのかを、自ら考え、課題を解決する力が重要だということになるのだろうと思います。そのために必要な情報は、AIに教えてもらったらいいいと思いますが、しかし、その情報の意味を理解して思考し判断するのは人間です。そして、まだ足りない情報を新たにつくり出すのも、やはり人間です。さっきのイタリア料理店の話でいえば、当たり前のことですが、誰かが最初にそのイタリア料理店に行って、自分で料理を食べて、雰囲気味わって評価しなければ、検索結果に出てこないのです。こうした力が、これからの滋賀の子どもたちに共通に身に付けてもらわなければならない学ぶ力であり、生きる力なのだろう、と思います。ただ、他方で生きる目標や目的は、1つではないわけですね。一人ひとりによって違うと思います。それによって、意義も意味も異なってきます。あるいは、その目標・目的を実現するために何ができるのか、という能力や資質の点でも個人によって違ってきます。ここに、個性を問題にする必要があるわけで、その目標を実現するために、色んな人たちが互いに協働していかなければならないし、その協働の必要性を理解して、お互いに理解し調整を行っていくことを身に付けないといけない。それが2本目の柱になるのだろう、と思うのです。私自身が今回のこの文章を読ませてもらって、滋賀県がどのような教育を求めるべきかを考えて、一つのストー

リーにまとめると、こんなことになるのかな、と思いました。

藤田委員

私なりに考えますのは、今の若い子たちに課題を出しますと、ほとんど調べてくることが考えるということに置き換わってきているように思います。今の子たちは考えるという段階から情報を検索して持ってくるということを経験的にできるような利便性の高い社会に生きています。昔なら辞書を引いたり、専門家に聞きに行ったりして考えるということを行ってきました。そういうことによって、先ほど知事の冒頭のお話のように、「人は人の中で人となる」という世界できていたわけです。そういう事から考えると、ITの中で子どもたちを育てるということは、少し子どもたちにとってもよくない部分はあると思います。人としての教養がなかなか深められないということがあり得るからです。

人によっては、考え方がマイナス100点からプラス100点まであります。情熱は、0から100まであります。そして知識は、テストをしたら0点の人から100点までいます。課題だと感じるのは、マイナス100点の人に掛け算してもマイナスしか出ないんです。だから、考え方を健全にきちっと育てていくということのそのルーツというか、その心はどこにあるのかということについていつも考えるんですよ。AIなどの進化の中で、今の高校生たちは、将来シンギュラリティといわれるものが到来したときに、社会を背負っていかなければなりません。その時に、優秀な人が出てくれば、出てくることをウェルカムだと思える人間になるためには、その知識の良さを使いこなせる人になる必要があります。これは教養が高い、深いということにつながっていくと思います、例えば、このロボットは優秀だなと思ったら、このロボットさえいてくれればもっとこんなことができる、というふうに考えられる力を持っていないといけないなと思います。

岡崎委員

話を聞いていて感じた事として、教育長がさっき言われたように、「総合教育会議」の題字を書ってくれたそれぞれの個性があるという

ことについてです。A Iにこれを書きなさいという命令や指示を出したら、きれいなサイズとかバランスのいい文字で、指示した意図を読み取って書くかもしれませんが、何もしないで、ロボットの前に白紙を置いたとしても、人間じゃなかったら文字は書けないし、絵も描けないと思うんです。だから、僕はそういう白紙のキャンバスに豊かな心で何かを描ける子どもたちが、自由に絵を描けて、その描き上がったものを見て、個性があっていいよね。それぞれ特色があるけど、それを、褒めあえる、認めあえる社会があればいいなと思います。

## 藤田委員

いま民間企業でも 1人で最終行程まで仕上げるというやり方をやっています。昔はラインでやって、みんながそういう方向に2000年以降なっているんですね。ところが、例えばある会社では、ロボットがその生産部分をやるということを考え、一万点もある部品の生産方法をロボットに教え込んでいます。こういうことに対して、人の仕事がとられてしまうというマイナスの考えになってしまうといけません。やはりプラスの方向に考え方を持っていく必要があります。ポジティブに考えられる人とは、絶えずポジティブな考え方と同時に、やっぱり教養が豊かな人だと思います。これをどこでどういうふうに教えるのかということも難しい課題だと思います。

## 土井委員

窪田委員がおっしゃった話は私もよくわかるのですが、今、アクティブラーニングをしなければならないと言われてしています。別の言い方をしますと、小学校では調べ学習、高校などでは探究学習が求められています。こうした学習は、先ほど私が申し上げたような、考える力を何とか子どもたちにつけていきたいという趣旨で導入されているのですが、下手をすると、結局、藤田委員や窪田委員が懸念されるように、子どもたちの発想をA I化してしまうことになりかねません。つまり、情報を調べなさいと言われて、そのキーワードをネットで検索をかけて、そこでヒットしたものを基にするわけですね。上手く切り貼りして見栄えをよくすると、それなりのものが出来上がります。それを持って来られると、それなりに出来上がっているのですが、実際には本人は何も理解していないという事態が繰り返されるおそれがある

るのです。

一見すると、出来のいいものほどそのような傾向があります。むしろ、自分なりに考えているものはゴツゴツしていて不格好だけれども、すごく綺麗で見栄えのいいものについては、本人に質問してみると全然内容を分かってないことがあります。AIが行っている統計的な検索処理は、実はこれに近いことを高速で繰り返しやっているに過ぎないということが、新井先生の言いたいことなのです。本当に当人が意味を分かっているかという、何も分かってないっていい。下手をするとアクティブラーニング、調べ学習も、それに近いことになりかねない。そこを何とかしないといけないというのが、この考える力の育成を進めていく上で、とても重要なところだと思います。このような機械的な対応をする子は、授業をしていると、ある程度分かるのです。おそらく学校の先生はお分かりだと思うのですが、ある質問をすると、質問にある文字の近くを書いてあることを答えてくるのです。「今の答えは違う」というと、また近くを探して答えを出してきます。文章を見て、ここかな、ここかなと、試し試しに出してきてこれは当たり、これは外れというのを繰り返している。大体、こういう質問されたらこの辺りにあることを答えたら、当たるだろうという対応を繰り返しているのです。

### 三日月知事

今の話についてコメントをさせていただきますと、さっきの新井先生の件でおおむね土井委員がおっしゃったことと共通の理解なんです。1つすごく気になった事と言いますか、衝撃を受けた考えとして、AIはもう既にそこその大学に入れる力を着けるところまできたわけですね。でも、さっきおっしゃったように、カレーが好きだ、というのと、私はあなたが好きだ、という違いの理解がまだできていない。そういうところに、人間のやるべきことがあるというお話でしたが、その人間が色んなものを読めなくなっているという状況があります。読み取らないといけない人の心を読めなくなったり。美味しいと思うものを、美味しいと感じられていなかったりする。要するに、人間がやるべきことをやれなくなっている人間がいるというところが、すごく衝撃でした。だから、例えば次の大綱なんかは、ある意味AIがやれることなら、やってもらったらいいんだけど、ここぞ人間、み

たいなところに力を入れるべきだと思います。

そういう時に、資料1の真ん中に目的があるじゃないですか。これが、極めて受動的に見えます。変化に対応、課題を解決。なんか、すごく受動的だったりします。あと、大人ができないことを子どもにはやらそうとしている感がすごくあり、そのような記述に既に陥ってしまっているのではないかという視点も必要です。あと、河上委員がおっしゃったように、今度の大綱を何年後を目指すのか分かりませんが。1年後の大綱をつくったとしても、1年先は、今よりもさらに多様化してると思います。2020年を経験した後の日本は、もしくは、観光客が2000万人以上来る日本が、僕らが想像する以上に多様化が進むとすれば、やはりそういうことを思考し、人として大事にするべき力を育めるようなものにすべきではないかと考えます。もしくは、私たち大人自身がしっかりと学べるような、そういう教育を進めていくことが重要なのかなと思いながら考えています。

土井委員

授業を変えていかなければならないのはそのとおりだと思います。授業でもそうですし、例えば、就職活動で面接をする時もそうなのですけれども、じっくり考えている子を低く評価してしまっている嫌いがあるのです。打てば響くようにどんどん答えてくる子、立て板に水のように喋る子が優秀で、一生懸命自分で考えて自分の言葉を探して話をしている子のことを、分かりが遅い子とか、理解できない子として評価してきたのではないかと反省してみる必要があると思います。どうしても短い時間で対応しなければなりませんし、授業なんかでも、子どもは30人ほどいるわけですから、特定の子どもだけに先生もかかってられません。そうした中で、子どもたちが何を学ぶかという、短い時間で、とりあえず答えを言ってみて、当たる当たらないを繰り返すことなのかもしれません。

藤田委員

情報化している社会に浸かりきって勉強をしてしまうと、人との煩わしさから、適応力が欠けてくるようにも思います。そういう人がたくさん世の中に出てきたら、これはどういう教育をしてきたのかということにもなりますので難しい課題だと思います。

河上委員

滋賀としての人づくりを考えることは重要なことだと思います。この春の高校野球選抜大会で、滋賀県、3つの高校が出ました。その時に、試合の成績自体もちろん大切なのですが、私がすごく誇りに思ったのが、その3つの中の2つの高校が応援の優秀校。最優秀校に選ばれました。それは技術的なことを見たものではなく、学校の先生方、生徒、そして地域の人たちが一丸となって、いかに心のこもった応援をして、選手たちを盛り立てているかというところや、マナーを見てもらったものだと思うんです。滋賀県には、自然もそうですし、文化的なものもそうですし、たくさんいいところがあります。昨年度の総合教育会議で真野小学校という学校内に古墳がある学校さんで、そこでの学習から県内、またその国の中、さらには海外ではどうなのかという学習を発展的にされてる様子をお聞きしました。本当に滋賀のものを教育に活かしていけば、子どもたちの心や視野を広げていく教育ができるように思いました。

土井委員

今日は目標に関する議題ですので、今後、こんなことを考えていってはどうかという提案です。この新たな大綱や基本計画の期間中に全部できるかどうか分かりませんが、学校教育の中で、先生がいて子どもたちが35人なら35人、30人なら30人が集まって、そこでじっくりやらないといけないことを明確にしていく必要があると思います。他方で、漢字を覚えさせるとか、九九を覚えさせるとか、どちらかという、できるだけ短時間で確実に覚え、答えられるようにするのは、ICTが得意なところだと思います。これを今までのように、学校の授業で先生がしようとされると、一人ひとりの能力に合わせてプリントを全部変えないといけませんし、また、指導もそれぞれに対応しないといけないということになり大変だったと思うのです。みんなそれぞれに進度が違うわけですから。しかしICTに任せてしまえば、それぞれに合わせて、それぞれの対応ができるわけです。それに対して、先生がいて子どもたちがいる場面では、一緒に話し合ったり考えたり、あるいは先生が一人ひとりの理解を確認しないといけないことをするように明確に分けていく方がよいと思います。ICTをどのようなかたちで活用していくのかという活用方法を考える必要もありますし、先生方が実際にそれを上手く活用されるためには、それな

りのトレーニングもいるでしょう。また、ICTの導入にはランニングコストを含めて予算どうするのかという問題もあります。したがって、やりましょうといってすぐにやれる話ではないですから、そのあたり、5年先、10年先見据えてある時期に本格的に導入する際のことを考えて、準備することも並行して考える必要があると思います。計画期間中に実現する目標と並行して、長期的な目標を実現するための準備を走らせることも、計画や大綱を考える上で大事だと思います。

三日月知事

AIに出来るところはAIに任せれば良いと思いますし、滋賀の教育の目指すべきもの、ですからね。目指すべきものなのだから今まで少しタブー視してきたものを、たたき台なのであれば、入れてもいいのかなと思います。例えば、平和とか愛とか、生死、生きることと、死ぬこととか。もう少し言いますと、宗教であるとか。おそらくそれらは、この目指すべきもののベースにあるのかもしれませんが。もうすでにこの資料に書かれていることの前提に入っているのかもしれませんが。

藤田委員

例えば、働き方改革というのは、教え方改革のはずなんです。教え方改革をしようと思うとね、やっぱりIT使わないといけないと思います。そう言い出すと、なかなか私も説明しづらいと思うんですけど、でも結果的にはそうだと思います。そういう意味では、他に自治体の教育委員会の人と議論した時に、すでに浄土真宗のことを教育の中に入れたって言う話だったんです。そんなこと出来るんですかって聞いたことがあるんです。人間にとって大事なものだから、やっぱり何千年も続いているわけで、それをどういう形で入れ込むかっていうのが非常に大事なことだと思います。

土井委員

道徳という言葉や宗教という言葉の持っているニュアンス、あるいは、その響きが色んな反応を招く可能性はあります。ただ、新井先生がおっしゃっている意味とか意義、あるいは、今、知事がおっしゃられたことは価値に関することなのです。何を大切にしていくなか、どうあるべきかという、価値に関わる問題なのですね。おそらく、AIもコンピューターも、そこを理解しないのだと思います。ある目的を設

定してやれば、それに合わせて計算をするけれど、何を大切にしているかというところは、やはり人間でなければ理解できないところがあります。将来A Iがどうなるかは分かりませんが、少なくとも、現段階でA Iは生きる意味を持たないということです。A I自身が、自分は何の目的に向かって、どういう生き方をしようかを考えるような仕組みを、今のところ持っていない。そこで、そのところは人間の問題として、どう考えるのかを、教育のベースにしなければならないということは、その通りだと思うのです。その上に何を学んでいくか、という話で、その価値に関するところが、それぞれ子どもたち一人ひとりの腑に落ちない限り、なぜ学んでいるのかが分からないということになります。そうなりますと、先ほど言ったように、とりあえず答えるという状況が出てきてしまいます。そこをどうしていくかということを考えていかないといけないと思います。

藤田委員

生きるということは死ぬということを約束していることであり、人は必ず死ぬということをどういうふうに教えていくかということも大人が知恵を出さなくてはいけないところだと思います。

三日月知事

私は学校で教えるということを言っているのではなく、滋賀の教育なので、滋賀県としてどう教えていくかということです。

岡崎委員

私も管理職になって部下の面談をしていて、今期の目標はどうしましょうかということをやっているんですけど、それぞれでやはり十人十色です。でも、面談しながら、これが皆同じ受け答えしたら面白くないなと思うんです。やはり、その十人十色の個性があって、頑として自分のやり方変えない子もいれば、上司の言うことは分かっているんですけど、できないと泣きついてくる子もいれば、いやいや、面白いですね一緒にやりましょうと言ってくれる子もいます。その組み合わせでやっていくことで、色んなものが掛け合わさって、ちょっと違うものが生み出されるという事だと思います。同じ考えばかりでやってたら、新しいことは出てこないと思います。

三日月知事

資料1の滋賀の教育の目指すべきものの下に、本県が目指すべき最上位の目的は何かということが書いてありますが、最上位の目的とは何なのでしょうか。

青木教育長

あんまり、子どもたちだけを考えずに、滋賀県には0歳児から100歳の人までいます。やはりその中で、それぞれの時代に応じた目標があるわけです。目的とも言いますか。だから、本当は決められるものではないと思うんです。そういう中でも、計画なり大綱をつくるわけですから、滋賀県全体としてこういうものを目指していこうということが私は最上位なのではないかなと思います。

三日月知事

なるほど。その時に取り組むべきことの中に、20年教育ということが書いてあります。この20年教育とはなんですか。

事務局

生まれてから育ち、小学校、中学校、高校と学んでいく中で、それぞれが独立していくよりも、それぞれがつながりを持ってやっていくことが有効だという御意見があったことから、それを未成年という枠で考えた時の20年間の教育のことです。

青木教育長

この目的と言いますか、目指すものがあって、それを達成するためにどういう教育をしていったらいいのかというイメージだと思っています。ですから、はじめに取り組むべきことがあって、やっぱりこんなふうのものを目指していこうよというもの。それをするにはどうしたらいいんだろうということが来るので、順番を間違えてしまうと、振興することが目的化してしまう時があるんで、今日、みなさんに御議論いただいている中で、いわゆる目的という部分を果たしておられる部分と、手段を果たしておられる部分がありますよね。ですから、言葉でなくてもいいと思いますので、例えば大綱で、目的というか目標というかっていうのが、まずは示すことができればというような思いはあります。

三日月知事

20年教育ということは、僕も使ったことがあるキーワードです。ただ、この時代になったら、人生100年なので、20年教育も大事

ですが、60歳からの学びの方が実はもっと大事なのではないかという感じます。また、目的のところにある生きる力については、実は生きる力って子どもの方が持っているのではないか、変な固定観念に縛られたり、昔できたことが今できなくなったっていう大人の方が、生きる力がなくなっているのではないかという視点もあります。

藤田委員

生きる力は年代によって悩む内容が違ってくるのでそれぞれの形があると思います。例えば、親から離れて幼稚園とか行った時、子どもたちは家庭ではない環境の中で悩みます。学校行ってさらに進学をする時、どこへ自分は行くのかと悩みます。社会に出た時も悩み、今知事がおっしゃったように、定年間近になってくるとまた悩みます。それでも何かね、生きてくという力を絶えず自分なりに支えていこうとすると、悩むっていうことは、生きている証なので、それをやっぱりエンジョイできるようにする必要があると思います。それをエンジョイするためには、考え方や心模様がそうさせるので、それをどうしたら養えるかということが大事だと思います。もっと大きなことを言うと、安心して生きて、安心して死んでいけるっていうことが人生の最大の目標だと思います。学校でも安心して勉強して、安心して仕事して、安心して生きて、最期安心して人生を終えるということが出来たらいいなという気がします。

だから、それを支えていくとなると、やっぱり学校では基本の雰囲気というのが結構昔から変わらない。読み書きそろばんをどこかで覚えて、流行に流されない心を養っていくということが大切です。今で言ったらAIの話になると思いますが、こう言う社会の中で子どもたちは生きていかないといけないんですよね。それをまた社会に取り組み、世界の中の日本として、日本人として、世界にしっかりと渡り合っていける人育てていかないといけないと思います。やるのは無さかしいことですが。ですので、滋賀の最上位の目標としては、滋賀の取り組みはいいねと言われるような言葉にすべきだと思います。

三日月知事

資料1の滋賀の教育の目指すべきものというところに、4つ書いてありますよね。この4つのうちの1番目は子どもに着目して、下3つ

は大人も含めてということからと私は理解していました。そうかなと思いつながら読んでいたので、実は多様な人と協働できる人づくりということに関しては、まず最初これからより長く生きる子どもたち一人ひとりに着目していく必要があると思います。やはり、滋賀にいて、滋賀に来る人、滋賀を通る人に理解や融合力を育てることが重要です。滋賀では琵琶湖の下流で水で使っている人のことまで考えてますというこの考えが大切だと思います。

藤田委員

愛については、いろんな事のヒントやベースになるように思います。できる人もできない人も、目的に向かって一緒に頑張りましょう、という気持ちというか、ゆとりの幅っていうのか無かったら、人間としては違うなと私は思います。

松尾芭蕉がなぜ43歳を過ぎて多くの詞を詠み、この滋賀に埋めといてくれと言われたと思いますと、やはり「こんな場所面白いな」と思われたからです。そういう人が大津におられたということやよそから来た、誰か分からん人をもてなす、愛とか力がこの場所にあったとすれば、それは滋賀らしいなと思います。

例えば、松尾芭蕉は自分の足跡を追うなという言葉を残しています。自分の足跡ではなく、自分の志したところを追えと言うんです。同じことをせず、それよりも、自分はこう歩いたが、その歩いた自分の志を継ぎなさいという言葉です。これでいま松尾芭蕉のことを思い出したところですが。何を自分が求めてつくってきたかということを追っかけよ、ということをつぶん教えたいのだと思います。だから、もしそこに弟子に対する教育の指針が組み込まれているのであれば、そこは大事なことです。

三日月知事

滋賀にいても、滋賀に来る人、滋賀を通る人に対する、それぞれの文化に理解力・教養力があって、その流行の中で何かを生み出そうとするその感性を持っていて、なおかつ、滋賀から育って、滋賀にご縁があって世界に行っても、やっぱり未来のことや社会のことや、周りの人のこと、もっと言いますと人だけではなく生き物のこと考えられる下流で水使う人がいるかもしれないという人のことまで考えて、「私たちは水を流すんです。」という、そこが大切だと思います。

## 土井委員

いま、松尾芭蕉の話をされましたけども、ここは教育にとって一番難しい点なのです。というのも、私も長らく教師をしていますけれども、教師として教育をしっかりできているかどうかは、私を超える人間をつくれるかどうかということなのです。私を超える人間を生み出せなければ、私の教育は失敗なのです。

もし、教育を通じて自分を超える人間を生み出せなければ、縮小再生産しかできていないということです。もちろん、自分をどれだけを超える人間を生み出せたかが、自分の価値になるというのは、ある意味、不愉快なことなのです。しかし教師とはそういうものですから、それは仕方ないとしても、非常に難しいのは、教えることからその子たちが育っていくことへの転換なのです。一から全部自分で考えてやれと言ったって、人類が今まで考えて積み重ねてきたことを、赤ちゃんが一から考えることはできません。したがって、どうしても教える必要があるのです。しかし、教えているうちにどんどん教えすぎると、自分で育っていくことを忘れて、すべて教えてくれという感じになるのです。そうになってしまうと失敗なわけです。ですから、教えなければならぬのですが、自分で育ってもらわなければならぬ、そのバランスを、どうやっていくのかということが問題なのです。先ほども話になったように、自分で目的を見つけて、自分でどうやって乗り越えていくかということを、どのようにして学んでもらうのか、このところが一番難しい問題なのです。効率的に教えようとする、どうしても、いかに教えるかに重点が置かれます。その結果、小さな時から、教えてもらうことを一番のみこみの早かった子ができる子とされて、下手をすると自分で学ばない子になってしまいます。もちろん、一から自分で考えろというだけですと、不効率ですから、そこをどうするのか。学校なら学校の学習活動のうち、こういうことをやらせるのは、AIならAIに任せて効率的にするけれども、この自ら育つようになるというところは、みんなでやらないといけないのではないかと思います。そういう意味で夢と生きる力っていうのは、育つことを重視していることなのです。生涯学び続けることが人としての在り方だと考えるわけです。なかには人類の進歩をもたらすような人材もいるかも

しれませんけれども、河上委員もおっしゃられたように、そんな子ばかりが必要なわけではなく、お父さんやお母さんのある部分を少しでも超えればよいとことだっていい、人間ってそういうものだと思うんです。

三日月知事

土井委員は、教えるというステージから、育つというステージに変わっていく時に何がきっかけになっていくと思いますか。

土井委員

教わるというステージから、自立的に育ち始めるようになるには、色んな事があると思います。まずは自分がどんな夢を持っているのか、どんな生きる力を持っているのかということも大事でしょう。私の経験では、本人が一番苦勞している時、苦しんでいる時が変わり目かもしれません。教わっている時は、教える側が準備したものをいかに吸収しているかどうかですが、自分のやりたいことが生まれてきて、教わっているだけではそれができなくなって、どうしていいか分からなくなって、苦しい時が成長している時ではないでしょうか。ですから、以前も申し上げたことがあるのですが、苦勞させないと教育になりません。

今は苦勞のさせ方が非常に難しく、苦勞のさせ方を間違えるとパワーハラスメントになったり体罰になったりしてしまいます。どの範囲で、どういう形で苦勞させるのが難しいですし、無意味に苦勞させても仕方ないわけですから、その見極めが大変だと思います。教える側にとって一番難しいのはそこかもしれません。この子が育つために、絶対乗り越えないといけない苦勞を本人が見つけて、それを見守ってやれるかどうか、ここが一番しんどいところなのです。それはその人によって、どの年代で来るか分からないですしね。でも、そこが一番伸びる時だろうと、今まで教えてきて、そう思います。

岡崎委員

子どもたちは厳しい先生のところで悩んだ時に、こう急に「勉強したい」って思うようになったという話も聞きます。やっぱりそういうことはあるんですよ。それはつまり、きっかけというのは1つだけじゃないという事だと思います。きっかけというのは。他面的に、色んなところで起きる可能性があるんで、どれがその子にマッチングして、

どのきっかけで火が付くか、というのは分かりません。うちも4人子どもがいますが、勉強に火が付いたのは1人です。それはやはり、その子に合った先生、よいタイミングいてくださったからなのです。

土井委員

自分で何ができるかを苦しんで、手に入れたものが、自分が何ができるかという意味で本当に重要なのかもしれませんね。

青木教育長

今まで色んな御議論をいただきまして、やはり大きな目標を定める必要があると思います。その時に、実は大きく2つ目標を定める方法を分けることができるかと思っています。例えばですが、方法論を目標にするとか、先ほど御意見のあった「悩ませる、悩ます教育をどうしたらいいのか」というところで結果を求めるのではなく、そういうことをすることによって色んな人間がまた育っていくだろう、大きくなるだろうという方法論を考えていくのかということが一つあります。あるいは、出来上がりのイメージについて考えるのかということを考えたいと思っています。今の議論で言う出来上がりのイメージといいますと、夢と生きる力を持つて人ということになります。この二つの考えはかなり違うと思うんです。いま色んな御議論をいただいて、ある部分はよく似ていると思います。次の大綱の中で掲げる目標として、私がまとめ役ということではないのですが、委員のみなさまの中にはそういう方法論を目標にした方がいいのか、あるいは、出来上がりのイメージを目標として掲げるべきなのか、どう思われますでしょうか。どちらの方を掲げた方がいいのか。あるいは、もう少し違う考え方があるといったご意見があればいただきたいなと思います。

藤田委員

目指すべきものと。それをどうやるのかということ、つまり目指すものと方法論は両方いると思います。まず目的があり、それを実現していくためには、どうすると実現できるのか、その到達点を目標にすることが一般企業では多い。だから、目標と目的というのは微妙に違う感じがします。将来のよき人材が育成できたとして、過去をさかのぼると違う教育をしていたが、結果的に10年経ったらすごい人材が生まれたということもあるかもしれません。教育ということは目先の

結果だけではないというところがありますので。ここでいう目的は、滋賀の目指すものなのでしょう。

青木教育長      そうです。目指すものです。

三日月知事      目指すものと取り組むことの土台に何かがあるのかもしれませんが。土壌といいますか、それこそ普遍的なものや不易なものとか。ベースになるものっていうものはそういうものではないでしょうか。

青木教育長      元々教育大綱と振興基本計画は別のものなんです。教育大綱というのと、振興教育計画というのは、出てきたものが違うんですが。ただ、やっぱり大綱というのは大きな理念や目標を示すものです。それと違う計画というものは出てくるわけがないので、大綱で示すことも当然ありその中で大きな方向性を示し、それを達成するためにこういうことをしていきますよという1つのパッケージもので出来れば私は考えています。

藤田委員      企業で言えば、企業倫理みたいなことになるのでしょうか。経営理念っていうのは、もう絶対的に会社の中でしっかり中心に添えているところが多いと思います。それを実践しようとする、時代に合わせていけないといけないところがあって、それを事業計画に落とし込むということになりますが、今回は教育の計画ですからね。

三日月知事      目指すものが一番上にあるんです。この目指すものを実現するために取り組むことがあったとすると、そのベースに滋賀の教育で大事にすることのようなものがあるとすれば、もしかしたら、これは教育だけじゃなくて、県のその基本構想的なものに通じてくるかもしれません。教育だけではなかなか語れないかもしれません。福祉と連携、産業とも連携してというのが出てきているとすればです。

土井委員      その中で、何を重要だと考えるかという問題があると思うのです。もちろん、教育にとって本当に基礎となる部分、最終的に子どもたちにどのように育ってほしいかという不易の部分はあると思います。た

だ、私も教育に関わってきて、考えなければならないと思うのは、教育の分野では、基本的に計画が総花的になる傾向があるのです。とても素晴らしいことが散りばめられていて、反論の余地はないのだけれども、ではそれをどうして実現していくかという話になると、よくわからないということになります。おそらく教育というものが持っている性格が影響していると思うのですけれども、しかし、政策を実現していくためには、何かを選びとっていかねばなりません。失敗するかもしれないけど、まずはこれを重点的にやってみようじゃないか、こういうことをなかなか教育はできないのです。どうしても教育では失敗は許されないという前提があるものですから。その結果、色々なことをいわば保険を掛けるように散りばめていきます。そして、出来上がった計画を見ると、何をしたらいいのか分からないという事態が起こってしまう危険があるのです。こうなりますと、おそらく学校現場にしてみても、市町の教育委員会にしてみても、県として何がしたいのかわからないと思われるでしょうし、市町で計画を立てられる時も、結局同じように総花的になります。もちろん、目標とか目的の部分は、不易な部分なので、ウェイトの置き方はあっても、そんなに大きく変わりません。ただ、それを具体的な計画に落としていった時に、この5年、あるいは10年の中でどの点に比重をかけるのかは、大綱でお書きになるのか、計画に示すのか分かりませんが、明確に出していかないと変わらないし、動かないと思います。

また、教育は、色々なことに対応して行く必要があり、バランスよくやらなければならないっていうことは、現場の先生方が一番そうお考えだと思います。子どもたちは日々色んなこと言うてくるし、それに対応する必要があります。その先生方に対して、将来を見据えて、ここを重点的にやっていくということを示していきませんと、結局、上から色んなことを言われても全部出来ませんという話になります。すでに様々なことを現場ではやっておられるわけですから、その中で、ある方向に向けてここを常に意識してほしいという点を、5年なら5年やってみようじゃないかという形で、ある程度絞ってやる。実際そこところには予算もつけるし、環境整備もやる必要があるのではないのでしょうか。それが出来ないと、おそらく色んなことが書かれていて、色んなことをしているだけになってしまう可能性があります。

三日月知事

今、最後に土井委員がおっしゃったことはもっともだと思います。いよいよ今年度は大綱を定めていく必要がありますし、これは知事がある意味考えて策定していくということだと思いますし、そのベースになるであろう議論を今日していただきました。おっしゃったように、目的とかの目指すものっていうのは、そんなに変わるもんでもないと思います。ただ、それを目指すために何をするのか、何に取り組むのかっていうことは、これは当然、これがまた振興計画に結びついていくことになると思うのですが、具体的かつ重点的に書かないと動かないということもあります。そして、動かなければ変わらないということだとすると、今日議論したことを踏まえて、ちょっと私なりにも考え、次の総合教育会議で教育委員会の皆さんともう1回よく揉ませていただきたいと思います。

藤田委員

今日は、随分いい話がたくさん出たので、これらのご意見を KJ 法で整理してみますと、ある程度見えてくるものがあるかもしれません。それができたら今日の意見のまとめをぜひ我々にも共有いただけたらと思います。

青木教育長

ありがとうございました。時間がまいりましたので、今日だけではなかなかまとまらないのですが、今日いただいた御意見を基に、もう1度事務局で考えてまいりたいと思います。

本日はお忙しい中ありがとうございました。これにて平成30年度第1回滋賀県総合教育会議を閉会といたします。お疲れ様でした。